

## 主体性等の 評価に向けて

# 主体性等の評価の導入で求められる、 生徒の変容を見取り、省察を促す力

次期学習指導要領では、学習評価の観点も「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つに整理されるが、そのうち「主体的に学習に取り組む態度」をどう評価するかが、高校現場の課題の1つとなっている。そしてそれは、高校教育とともに改革される大学入試も同様だ。そこで、大学入試における主体性等の評価の実現に向けて開発中の「JAPAN e-Portfolio」にかかわる大学の研究者と、高校現場の教師に、主体性等の評価について語り合ってもらった。

### JAPAN e-Portfolio とは

#### 生徒の活動に表れる言動で 主体性を評価

—— JAPAN e-Portfolio（以下、Jep）は、高校における主体性等の評価を考える上でも参考になるものだと思います。そこで、まずはJepの開発チームのメンバーである関西学院大学の時任隼平専任講師から、Jepの概要についてご説明をお願いします。

**時任** Jepは、高校生活の活動を記録するeポートフォリオです。これまで大学の一般入試では、ペーパーテストで測る知識・技能の比重が大きかったのですが、今後は、高

北海道札幌北高校

**福士公一朗**

ふくし・こういちろう

教職歴33年。同校に赴任して6年目。教務部長。



校での様々な活動から受験生の主体性を評価するために、eポートフォリオの必要性が高まっていることから、文部科学省の委託事業として開発を進めています。2018年度が研究の最終年度で、現在、全国の約

兵庫県・私立灘中学校・高校

**井上志音**

いのうえ・しおん

教職歴13年。同校に赴任して6年目。



2900校の高校の先生と生徒に無料で活用いただいています。

本事業には、多くの高校の先生から、「そもそも主体性を評価できるのか」といった質問をいただきます。主体性は他の資質・能力に比べると

岡山県立玉島高校 副校長

**山崎淑加**

やまざき・よしか

教職歴26年。同校に赴任して4年目。



非常に抽象的なものであり、生徒が主体的な思考をしていても、それが言動に表れない限り、測ることはできません。そこで、Jepでは、生徒の具体的な言動から、主体性があるかどうかを評価します。また、最

最終的な到達段階だけではなく、そこに至るまでのプロセスを見ることができるよう、生徒が自身の活動を振り返り、その過程や結果に対して何を考えたのかを記入する「リフレクション（省察）」の欄を設けました。

項目の作成前には、スーパーサイエンスハイスクールやスーパーグローバルハイスクールの指定校の教師、大学教員、企業の人事担当者を対象としたアンケートを実施し、高校生・大学生・新入社員などのような行動に主体性を感じるのかを調査しました。高校現場の実感や企業の価値観とすり合わせて項目を設定しているのも、J e Pの特徴です。

**ポートフォリオの教育的効果**

**深い省察を促すには  
教師の働きかけも必要**

**山崎** J e Pは、学校生活のあらゆる活動が網羅されている点が良いと感じています（P.18図）。探究活動や学校行事、部活動など、教科学習以外の努力も評価されるようになっているので、生徒の学校生活全般への意欲が高まりそうです。高校現場でもうまく活用するとうれしいと思います。



長崎県立大学教育開発センター特任助教等を経て、2016年9月から現職。

**井ノ上憲司** いのうえ けんじ

大阪大学 高等教育・入試研究開発センター 特任助教

**井上** 私は、リフレクションが入っている点が良いと思います。これに「反省」の意味を取ると、失敗した時に行うものというイメージになりませんが、成功時も何が成功につながったのかを省察し、自分が次に何をすべきかが明らかになれば、活動への意欲が高まるのではないのでしょうか。

**福士** 自分の活動を言語化することは、メタ認知を促す点でも効果的です。生徒に振り返る力をつけるために、何度もリフレクションをさせることが大切でしょう。

**時任** 私は、先生方の指導があつてこそ、生徒は中身のある省察ができるようになると思っています。あ



文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業（主体性等分野）研究グループメンバー。

**時任隼平** ときとう じゅんぺい

関西学院大学 高等教育推進センター 専任講師

る高校では、1年生の「情報」の授業で自由に振り返りを書かせたところ、「グループワークが難しかった」「画像の設定が難しかった」など、表面的な感想にとどまっていたそうです。生徒は初めから省察力を持っているわけではありません。先生方が教育的な意図を持ち、J e Pのリフレクションの項目を設定することで、深い省察に至るようになると考えています。私自身、大学の授業で振り返りができない学生が多いと感じています。頭の中でいろいろ考えていても、それを言語化するにはある程度の訓練や経験が必要です。大学に入る前段階から、省察する力を

**主体性の評価の意義**

**見えない学力を可視化し、「教育の本質」に迫る**

育成する必要があるでしょう。

**井上** 生徒の言動を通して主体性を見ることがありますが、高校が考える主体性と大学が考える主体性には、その認識に違いがあることもあります。各大学は入試において、J e Pの項目からどのように生徒の主体性を見ていくのでしょうか。

**井ノ上** 各大学は、J e Pにある項目のすべてを見るのではなく、自学のアドミッション・ポリシーに依じて項目を取捨する形になると考えます。探究活動における主体性を重視するならば、その項目を参照するでしょうし、生徒会活動や部活動を見る場合もあるでしょう。そのため、大学が「こういう面で主体性のある生徒がほしい」といったことをアドミッション・ポリシーで明示する必要があります。

**福士** 大学入試でポートフォリオが使われるという点、「入試のために教育をしているわけではない」と抵抗感を持つ教師もいます。しかし、

## ☒ [JAPAN e-Portfolio]



JAPAN e-Portfolio のトップ画面 (https://jep.jp)

### ◎JAPAN e-Portfolio に記録できる「学びのデータ」例

探究活動	基本情報*1/参考文献/実験/研究室訪問 等
生徒会・委員会	基本情報*1/会議記録/業績の記録 等
学校行事	式典・行事/修学旅行・研修旅行/スポーツ大会・体育祭/文化祭・学園祭 等
部活動 (スポーツ活動)	基本情報*1/大会・試合の結果/代表への選抜履歴/段位の取得等/ベスト記録・通算記録 等
部活動 (文化芸術活動)	基本情報*1/コンクール・コンテスト・大会の結果/代表への選抜履歴/作品・成果物 等
留学・海外経験	留学/フィールドスタディ/交流イベント 等

\*1 活動内容や所属など基本的な情報を入力できるようになっている  
\*取材を基に編集部で作成

J e P の場合、入試利用の側面もさることながら、ポートフォリオを活用することで、これまで「見えない学力」と言われてきた部分が「見える化」されます。それこそが重要だと思えます。ポートフォリオの項目を意識することで、教師の指導観や生徒を見る視点が変わり、「教育の本質」により迫ることができるのではないのでしょうか。ただ、保護者の中には、主体性を評価することが、生徒の人格や価値観をも評価するものと捉える方もいます。ポートフォリオの活用にあたっては、保護者への丁寧な説明も必要でしょう。

### 大学入試での活用

## 主体性を評価する観点を 大学は募集要項に明記

—— 大学が J e P の入力内容を入試の際にきちんと評価してくれるのかといった不安を抱く先生もいます。大学は、入試において J e P をどのように活用するのでしょうか。

**井ノ上** 各大学は、入試区分ごとに J e P のどの項目を見るのかを、募集要項に明記することになります。

大学によって見る項目は異なると考えられますから、全体として、多くの項目が入試で見られることになる

と推測しています。

**時任** J e P に限らず、大学が受験生に提出を求めたものは、評価の対象として利用することが入試の原則です。仮に見られない項目があったとしても、福士先生が言われた「教育の本質」を追求するという観点で、生徒が自身の高校3年間の軌跡を客観的に振り返る教育的効果は、小さくないと考えています。

**井上** 一般入試の調査書の扱いは変わるのでしょうか。

**井ノ上** 国立大学協会は20年以降の方針として、調査書が活用できる入試から順次導入することを求めています。これからデジタル調査書の普及が進めば、容易に情報を把握できるようにになるので、一般入試でも調査書が今まで以上に重視され、探究活動や学校行事など、多様な活動が評価対象になると考えられます。

### 主体性の捉え方

## 大切なのは、失敗を振り返り、 成功への道筋を探る過程

**山崎** 調査書の比重が高まると、生徒の資質・能力そのものではなく、教師の調査書作成能力が合否を左右

するのではないかとといった懸念もあります。生徒の多様な活動で主体性を評価することは、そうした懸念を払しょくする上で有効だと思います。今、高校現場では、ベテラン教師の大量退職により、若手の指導力向上が課題になっていますが、教師が生徒の変化や成長を見取る力がより重要になるのではないのでしょうか。

**井上** 生徒が確実に成果を上げている場合はよいですが、そうでない場合にどこまで書いてよいのか、判断に迷う場面が出てくると思います。

**井ノ上** 失敗をどのように捉えるのが重要になるでしょう。例えば、探究活動や部活動で目に見える成果が得られなかったとしても、生徒なりに頑張っており、その結果に至った理由が論理的に述べられていれば、十分評価に値すると思います。失敗を否定的に捉える必要はありません。大学での研究にも、失敗はあります。研究を進める上で大切なのは、なぜ失敗したのかを客観的に振り返り、そこから成功に導く道筋を組み立てる力です。失敗から立ち直る経験を積んできた生徒の方が、すんなり成功した生徒よりも、粘り強く頑張れる人物と評価されるかもしれませ



ん。調査書に生徒の失敗や否定的なことを書くのはためらわれるかもしれませんが、失敗後の言動を粘り強さや主体性を測る指標と位置づければ、生徒に対する見方も変わるのではないでしょうか。

**福士** 「J-e Pを見てみると、エビデンスばかり求められている気がする」と言う教師も少なくなく、挫折

しながらも頑張っている生徒は評価されないのではないかとといった不安を抱えています。確かに、研究には失敗がつきものです。大学が生徒の失敗を前向きに捉える意識を持つていることが分かり、安心しました。

**時任** コンクールに入賞した、学会誌に論文が掲載された、といった「結果」だけで評価するのは、主体性等の評価の趣旨に外れます。結果に生徒本人がどう向き合ったのか、活動について振り返りをしっかり行えたかどうかが重要です。生徒に省察を促し、思考したことを言語化できるようにするためには、高校の先生方が果たす役割は大きいと思います。

**高校の教師に求められること**

**教師自身も省察し、課題に取り組み**

——主体性等の評価が求められる中、高校にはどのような取り組みが求められるのでしょうか。

**福士** ポートフォリオ作成に取り組むみ始めた本校において実感するのは、学校の方向性を無理にそるえなくともよいのではないかということです。考えに多少の違いがあっても、

主体性の育成や評価の大切さは、教師間で共感できる部分です。ポートフォリオは大事だからと、無理に足並みをそろえるのではなく、先生方を信頼し、それぞれの思いを認め合うことで、徐々に目線をそろえていけばよいのではないのでしょうか。

何より効果的なのは、生徒の変容を先生方に実感してもらうことです。本校では、文部科学省から「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた指導法の研究指定(\*)を受け、「学校全体をアクティブな学びの場にしよう」と、16年度から授業改善に取り組んできました。その結果、生徒がホワイトボードに自分の考えを書いて説明し合う光景が日常的に見られるようになりました。そうした生徒の変容が、「もっと生徒はできるのではないか」といった教師の意欲を高めていると感じます。

**山崎** 今後、ますます大切になるのは、アクティブ・ラーニングの実践を通して、授業を生徒の主体性を発揮させる場に変えることです。これまで教師には、生徒を正解に導くことが求められてきました。そのため、教師自身が、正解が1つではない問いに対応する力、生徒が自ら考えて

解を出せるように導く力を高める機会が少なかったと思います。今後は、大学での教員養成段階から、教師の資質・能力として、省察を促す力やファシリテーション力を伸ばすことが課題になるでしょう。

**井ノ上** 気をつけなければならぬのは、「先生が言うことは、すべて正しい」「先生は知識を教えてください存在だ」と、生徒に思わせてしまうことです。そうすると生徒は「先生の言うことを聞いていれば大丈夫」と捉え、言われたこと以外はしないといった状態になりかねません。大学にも、自分で研究課題を探せない、4年生になってもやりたいことが見つからないという学生がいます。「間違っても大丈夫」という雰囲気をつくり、生徒に主体的に考えさせる経験を通して、失敗を恐れず挑戦する意欲を育むことが大切でしょう。

**井上** 「発問」では教師に、生徒が持っている課題や問題を発見する力が求められます。そうした力は、教師が経験の中で身につけていくしかありません。今後は、学校現場で課題や問題を見つけ、それにどう対応していくかという、教師自身の省察力も問われるのではないのでしょうか。

\*「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」